

田中康夫の



19

「33年後・33年前」

「時代と共に変わる『よい品』を、だれでも、いつでも、どこでも、欲しい量だけ買える仕組みを作る」との信念で中内功氏が「主婦の店ダイエー」を創設したのは1

年、西武百貨店取締役店長に堤清二氏が就任。1980年代から90年代に掛けて数ヶ月に一度、個別にお二方の警咳に接する機会を得ていた僕は改めて想起します。

「人々の日々の暮らしが姿を消し、『お国のために』が前面に出て来たとき、戦争が始まった。流通が消え、配給が登場した」と警句を発し続けた中内氏も、「武器と麻薬と売春だけは決して扱わない」矜持を抱き続けた堤氏も、国家益

＝富国強兵ならぬ国民益＝富国裕民、即ち愛国心ならぬ愛民心の心・智を抱き、戦後ニッポンを疾走した実践的・思想家、だと。

「流通革命」という名の社会革命を公言した中内氏も、「私には資本主義社会、自由主義経済をより良く正すトロッキストとしての役割が課せられているのかも知れませぬ」と僕に述べ懐した堤氏も、供給者である前に自身も一人の消費者であるとの冷静・冷徹な認識に立って、「資本の論理だけに換算されない」人間の存在価値を希求していたのです。が、共に晩年「消費者が見えなくなった」と慨嘆するに至ります。

幸か不幸か卒業直前の停学処分

に伴い、重化学工業振興を担う特殊銀行として日露戦争直前の明治35年に設立された日本興業銀行への就職が叶わなくなった僕は、大学の図書館で小説なる形態の文章に生まれて初めて取り組みます。

1980年＝昭和55年のゴールドデューク明けです。その秋の「文藝賞」選考会で江藤淳、野間宏の両氏に評価され、翌年1月に上梓。人口に膾炙しました。

今やその人口よりも契約台数の多い携帯電話が重量900gの機器で供用開始されるのは6年後。待ち合わせ場所のハチ公前に現れぬ相手は、バックレたのか事故故に巻き込まれたのか、今から33年前、連絡を取る術は有りませんでした。星霜を経て、深夜着信のLINEを未読で小中学生が登校すると同級生から虐められる昨今。私達は便利と自由を得たのか、束縛と監視に陥っているのか、即答しかねる33年後なのです。

「1980年に大学生だった彼女たちは、いま50代になった。」と帯に記し、浅田彰・菊地成孔・斎藤美奈子・高橋源一郎・壇蜜・なかにし礼・浜矩子・福岡伸一・山田詠美・ロバートキャンベルの

10氏から推薦文を頂戴した『33年後のなんとなく、クリスタル』を11月末に上梓しました。

「この本は現代の黙示録かもしれない」と「サンデー毎日」連載で過分な評価を下さった、なかにし礼さんの文章を更に拝借すれば、「作者が過去の作中人物と再会するという手の込んだ仕掛けの小説」。それは「なんくり」の膨大な註の一番最後に記した出生率＆高齢化率の将来予測を大きく上回る現実に直面する、これまでの・いまの・これからの「ニッポンを記憶の円盤」が映し出すブルー・スト的な時間感覚です。

実は前述の「経済白書」は、バラ色「高度成長」礼賛論に非ず。量の拡大から質の充実へと転換を促す預言書でした。曰く、「近代化＝トランスフォーメーション」とは、自らを改造する過程である。「そして自らを改造する苦痛を避け、自らの条件に合わせて外界を改造（トランスフォーム）しようとする試みは、結局軍事的膨張につながった」との。「33年前、あなたは何をしていますか。」そして「33年後、あなたは何をしていますか。」

957年＝昭和32年。その前年の昭和31年、「経済白書」＝「年次経済報告」は「もはや『戦後』ではない」と謳います。奇しくも僕の生まれた年。更に前年の昭和30

★次号1月号の発行日は12月26日(第4金曜日)です。